
正義の味方を目指した『殺人貴』

眠れる英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方を目指した『殺人貴』

【Nコード】

N8467Z

【作者名】

眠れる英雄

【あらすじ】

これは、一人の少年の物語。誰よりも『正義の味方』に憧れながら、誰よりも『殺人貴』に近かった男の物語。そんなガラスのような少年は、何処に向かうのか。「言っただろ？俺が……『殺人貴』だ」

平穩

シキはさ、どんな大人になりたいんだ？

眩い日差しの中で、彼　ナギ・スプリングフィールドに訊かれる。
その笑顔を、その強さを、決して失いたくないと。

こんなにも世界は美しいのだから、今この瞬間の幸せが永遠であつてほしいと。

そう思うから、誓いの言葉を口にする。

今のこの気持ちを、いつまでも、決して忘れずにおきたいから。

俺はな、正義の味方になりたいんだ

「……………うん？　夢か……………」

暖かい日差しに照らされて、俺は半分寝惚けたように呟いた。日の傾きが、先ほどと比べてだいぶ差がある気がする。

俺は寝転がっていたベンチから身体を起こすと、寝惚けた頭を回転させるべく思考の海に潜る。

俺の名前はシキ・クライスト。今年で確か13歳になる。今はフリーの傭兵で、確か雇い主の名は

「む？ 何じゃシキ、もう目を覚ましたのか？」

後ろから声をかけられる。振り返ると、そこには両手にソフトクリームを持った俺の今の雇い主 アリカ王女がいた。

「……よう、アリカ。買い物は終わったのか？」

「何を言っておるか。お主のせいで休憩しておったわ」

そう言っただ渡されたソフトクリームを受け取ると、アリカも同じように俺の横に腰かけた。

「しかしさ……何が護衛だよ。完全にお前さんの荷物持ちじゃねえか」

そう、今日の俺の仕事はコイツの護衛だった。本来なら今日は昨日の疲れを癒すために一日中部屋で寝ているつもりだったんだが……。

「何か文句でもあるのか？ 護衛はお主の仕事じゃろうが」

「荷物持ちは仕事じゃねえよー！」

俺は怒鳴るように言いながら、ソフトクリームを食べていく。疲れた身体に染み渡る甘さが、身体を癒していく。

「てかよく普通に買えたな？ お姫様がこんな所にいたら驚くだろ普通」

「？ よくわからんが、何でも『デート』とやらでサービスらしいぞ？」

「……おい、ちょっと待てやコラ」

誰と誰がデートしてんだよ。

チラッと向こうでソフトクリームを作っている屋台のおじさんを睨むと、どういうわけか満面な笑みでグツと親指を上に向けたままこちらに腕を突きだしてきた。

……違いますよおじさ ん！ 俺とコイツはカップル何かじゃありません！ ただの依頼主と傭兵の関係です！

「ところでシキ。『デート』とは何じゃ？」

「知るか。王宮の奴らにでも聞いてろ」

「むう、いったい何なのじゃ……？」

不思議そうに首を曲げるアリカの様子を見て、思わず苦笑する。

本当なら、俺はコイツの側になんかいてはいけない。俺みたいな何

万人の命を奪ってきた『殺人貴』が、こんな平穏を感じてはいけな
いはずだ。

アリカはみんなの『光』の存在だ。その笑顔が人を、国を元気にす
る。俺みたいな『闇』が側にいてはいけないのだ。

…… いったい俺は、どれほどの命を奪ってきたのだろうか？ 少し
でもたくさんの人に笑っていて欲しい。そんな、馬鹿げた理想を胸
に走ってきた。

十救うために一を殺し、

百救うために十を殺した。

千を救うために百を殺し、

万を救うために千を殺した。

彼らは悪いことなんか一つもしていない。ただ、そこにいただけで
死んだのだ。

…… 俺の、この手のせいで。

『そこにいたお前たちが悪い』、なんてことは言わない。悪いのは
全て俺なのだから。

結局俺は誰も救ってなどいない。少しでも犠牲が少ない方を切り離
しただけ。自己満足で殺しただけだ。

そつ、だから俺は『正義の味方』などではない。

俺は『悪』であり、『殺人貴』であり、そして

「……おいシキ、聞いておるのかシキ！」

「うあ？」

耳元で聞こえた声に、俺は意識を覚醒させる。横を見ると、アリカが心配した顔付きでこちらを見ていた。

「大丈夫かシキ？ 急に黙ったと思ったら、何やら複雑そうな顔をしていたが……」

……コイツに心配されているようなら俺もまだまだだな。

俺は出来るだけ無理な笑みを浮かべると、心配そうに見つめてくるアリカの頭を強引に撫でて、

「大丈夫だつつの。それに、お前に心配されるほどヤワになった覚えはねえよ」

「な、や、止めるのじゃシキ！ 頭を撫でるのではないッ！」

撫でる手を振り払おうとするアリカの攻撃をかわすと、横に置いてあった荷物を手に取りアリカに向かって笑いかける。

「ほら、行こうぜ？ 久しぶりの休日だ。何処までも付いていってやるぜ、お姫様？」

「……当然じゃ。お主は私の騎士なのじゃから」

アリカは一瞬恥ずかしそうに頬を赤くしたが、やがて差し伸べていた俺の手を握り締めた。

「俺は騎士じゃないんだけど……まあいいや。ほら、次は何処に行きたい？」

「む、次は向こうなどどうじゃ？」

「へいへい、了解つと」

そうやって手を繋いだまま歩く二人。その後ろ姿はまるで

……確かに俺はコイツの側にはいられない。

だから、俺は待とう。

コイツを、救ってくれる人が現れるまで

心優しさ『殺人貴』 By アリカ

あの男と出会った日のことを、私は今でも覚えている。

何時もヘラヘラしていて、王女である私にも一切敬意を示さず、私をアリカ王女ではなくアリカという女性として見てくれる存在。

けど、本当に彼はそんなに能天気なのではない。本当は夜な夜な自分が殺した罪にうなされ、誰も殺したくないと心から願っていることを、私は知っている。

『正義の味方』を目指しながらも、自らのことを『悪』と名乗り、誰よりも優しい『殺人貴』である

シキ・クライストのことを

初めて出会ったのは、とある戦場だった。私が偶然援助を勤めることになった戦場で、あやつは風の如く現れた。

黒いロングコートを身に纏い、顔はフードで見えず、静かに立たずむその姿は恐怖の存在だったのを覚えている。

『……悪いけど、アンタたちには死んでもらう』

その一言が引き金だった。そこから先に待っていたものは 虐殺だけだった。

例えばどんな魔法を使っても、ナイフが魔法に触れた瞬間消滅した。鬼神兵が攻撃しても、またナイフが鬼神兵に刺しただけで跡形もなく消滅した。そう、どんなものも一撃で全て消された。

向こうはナイフ一つしか持っていない。その筈なのに、たった一人殺すところかその一人に軍隊を潰されかけられた。

それで思い出した。噂になっていた、ある話を。

まるで幽霊のように現れる黒コート。現れるのは戦場だけで、現れたのなら片方が全て死ぬまで殺し尽くす戦場の死神 『殺人貴』のことを。

唯一の救いは、あの時はシキが味方だったことだ。もしもあの時、彼の標的が自分たちだったのなら……考えただけでもゾツとする。

私はその時、一度だけ彼を間近で見た。私の正体が敵にバレ、敵国の兵士に襲いかけられて 彼に助けられた。

きっと彼からしたら偶然だったのだろう。ただ敵を殲滅していたところに私がいて、偶々私を助けた形に過ぎない。

けど、あの時のシキは、私にとって

窮地を救ってくれた、『正義の味方』に見えたから

……だからその時決めたのだ。例えどれだけ時間をかけても構わない。必ず彼を、見つけ出すと。

そして時は過ぎ 現在にいたる。

「てかアリカ様？ 貴方には俺のこの左腕が見えませんか？ もう荷物がいっぱい持つところがねえんだけど」

「ふむ、まだ頭の上が空いておるな」

「いやいや、無理があるだろおい!？」

そうやって二人で軽口を叩きながら街の中を歩いていく。シキは嫌々文句を言いながらも、私の手を放さず握り返してくれる。

暖かい……手。とても悪の人にはない暖かさがあり、思いやりを感

じる。

こんな手を持っている人が、『悪の殺人貴』なはずがない。

「……………シキ」

彼の名前を呼ぶ。本当は少しだけ、不安があつた。もしかしたら自分は嫌われているのではないか？ 迷惑に思われているのではないか？ そんな不安が、私の心を駆け巡っていく。

私は知っていた。シキの仕事 悪名が知れ渡った者の、暗殺。

誰にも頼まれることなく、全て自分一人で用意を済ませ、誰にもバレルことなくターゲットを殺す。そのようなことを、私の護衛になつてもシキは続けていた。

そして その夜、殺した人々の顔を思い出し、うなされ、涙を流していることも、全部知っていた。

だから今日は無理矢理シキを誘つたのだ。少しでも息抜きになるように、少しでも彼のためになるように。

だが、それは彼女にとって迷惑だったのでは

「つて危ねえ!？」

「え？」

不安がつっていると、シキは急に私の肩を掴み、己れの身体に引き寄せた。

そしてその後に来る突風。それは私の横をとてつもない速さで通りすぎ、もしもついさっきまでの場所に立っていれば下手をすればかなりの重症を負っていたかもしれない。

「　　まったく、危ねえな。こんな狭い道であんなトップスピードで移動するなよな……………ってアリカ？」

シキの奴が何かを言っている。だが、それを理解するまでの情報処理能力をそちらまでに使えなかった。

いま私は握っていた右腕で肩を掴まれ、そのまま抱き寄せられた。つまり

顔と顔が後数センチの所で停止し、まるで抱き締められる形で立っていた。

「……………な、何をしておるか　　ッ！」

「べらさッ!？」

突然のことに顔が真っ赤になり、条件反射で王家の魔力を込めて右頬を叩いていた。

その一撃で吹き飛ぶシキ。空中で三回転もし

「　　っていきなり何しやがるッ!？」

見事空中に舞った荷物を全て受け止め、華麗に着地した。

「お前、人がせつかく助けてやったのにそのお礼がビンタってどういっつもりだ馬鹿アリカツ!！」

「ええいっ！　いきなりおかしな事をするシキが悪いのじゃッ!！」

「ええっ!？　まさかの責任転換ッ!？」

そうやってシキと言い争いながらも、自分の顔が赤くなっていくのが分かる。

シキの悪いところはそこだ。自覚していないのか、何時も無意識に此方がドキッとしてしまうことをする。

まったく、わざとなら此方も怒れるというのに……。

「やれやれ、まったく我が儘なご主人様だ……」

シキはそう呟きながら前へ進もうとする。当然……その右手には、何も掴まれてなどいない。

「あ……」

今思えば、彼から手を差し伸べてきたことなどあったのだろうか？
何故、もっと彼の手を握らなかったのだろうか。

後悔が胸に突き刺さる。そのせいで、思わず立ち止まってしまふ。

ああ、あの時もう少し我慢していれば

「……ああもう、まったく世話のかかる奴だな、本当に」

「えっ？」

俯いていた私の手が誰かに掴まれ、前に引っ張られていく。顔を上げると、そこには仏頂面なシキの顔が。

「まったく、何処まで世話がかかる奴なんだお前は。ほら、とつとつ次行くぞ？」

シキはそれだけ言うと、私と手を繋いだまま前に歩き出した。決して遅くなく、されど丁度良い速さで歩いてくれる。

「……シキ、一つ良いか？」

「あ？ 何だよ急に」

これだけは、どうしても聞いて置かないといけない。例えその答えが否定であったとしても。

「シキは今……幸せか？」

「……………」

勇気を搾り取って言った言葉に、シキは沈黙する。そして数秒間、考える素振りを見せて、

「……ま、確かに今こうして現在進行形で迷惑にあっているけど」

「うう……………」

やっぱり、迷惑だったのでは

「それでも、悪くないと思っているよ」

「え……………」

シキの言葉が頭の中でコールする。今、彼は何て言った？

「ほら、速く行こうぜアリカ。さっさとしないと置いて行くぜ？」

シキは少し恥ずかしそうに顔を背けながら歩き出す。

けど、その手を放すことはない。

「……………はい」

そんな彼の様子が嬉しくて、彼の手を握る手のひらに力がこもる。

ああ、自分が今までしてきたことは無駄ではなかったのだ。今まで
のことは、ちゃんと彼の心に刻まれてきたのだ。

暗い影を落とすシキ。きっと彼は、地獄には自分一人で落ちようとする
だろう。きっと、全ての罪を背負って。

だが、そんなもの私が許さない。シキが地獄に落ちるといふのなら、私が地獄から引きずり上げてみせる。

だって、シキは私にとって

……シキは何時も独りになろうとする。

だから私が側にいよう。

シキの側に、いつまでも

戦う理由（前書き）

俺には、殺すことしか出来ないから。

戦う理由

人々の嘆きが聞こえる。助けを求める声が聴こえる。

俺は普段着を脱ぎ捨て、戦闘着である黒コートを羽織り、フードを被る。

体調は万全。魔力の貯蔵も十分。武器であるナイフもひび割れはなく、何時でも切れる。

……準備は整った。後は、行くだけ。

俺は自室を出て、外に向かう。辺りは闇に包まれていて、窓の外から見える月だけが廊下を照らしていた。

コツコツ、と、俺の足音だけがその場に響く。闇が、全てを飲み込んでいく。

「……この辺でいいか」

ここまで来れば、流石のアイツでも気付きまい。

俺は右手を突き出す構えをとり、魔力を解放する。作るのはゲート。何百本の影で作られた、闇の扉。

「……『ゲート・オープン』」

地面から闇よりも更に深い闇が溢れだし、目の前に空間を作る。そ

れは扉というには脆く、闇というには形がしっかりとしていた。

これは一種の転移魔法。目標となる地点を正確にイメージすることで境界をなくし、空間と空間を繋げる魔法。俺がもっとも得意とする魔法だ。

……行く準備は出来た。行く道も出来た。もう迷うことはない。さあ

「……やはり行くのか？ シキ」

ピタリと、俺の動きは止まった。振り返る。そこにはやはり声の主である アリカがいた。

「……よう、こんな夜遅くにどうした？ 徹夜は美貌の天敵だぜ？」
俺はなるべく何時も通りに話そうとする。おかしな所はないだろうか？ 俺は何時も通り笑えているだろうか？

「誤魔化すのではない。その闇の扉は、何処に向かうものじゃ？」
そんな俺を見透すように、アリカは単刀直入に聞いてくる。答えなければ殺すと言わんばかりの目付きの悪さで。

「何処つて……ちよつくら散歩にでも行こうと思ったただけだぜ？ 最近寒いしな、丁度暖かい服装がこれしかなくて」

「嘘じゃな」

俺が最後まで言い切る前にアリカがそれを否定した。アリカは強い力のこもった目で俺を睨む。

「お主がその格好をする時は戦場に行くときだけじゃ。それ以外、『殺人貴』の服装をするはずがないじゃろ」

「……参ったな、何時から気付いてたんだ？」

確かに、俺がこの服を着るのは仕事をする時だけだ。この服を着ている限り、俺は『殺人貴』なのだから。

「……どうしても行くのか？ どうしても行かなくてはならないのか？」

アリカはさっきとは違って弱々しい声で俺に問いかける。今にも泣きそうな声で。

その問いの答えは 始めから、決まっていた。

「ああ、俺は行く。戦争が起きているなら、俺は行かないと。だって俺は、正義の いや、『殺人貴』なんだから」

そう、俺の名は『殺人貴』。殺すことしか出来ない愚か者。殺すことしか、誰かを救うことが出来ない。

そうだ、俺は 『 』 ではないんだ

「……話は終わりか？ 俺はもう行くぞ」

話を遮るように俺はフードを深く被り直し、闇の中へ堕ちていく。音が、光が、闇に飲まれて消えていく。

「ま、待つんじゃないシキ！ 待つ」

後ろからアリカの声が聞こえたが、それさえ闇に飲まれて消えた。

全てが闇に飲み込まれた世界。このコートのおかげで消えずに済んでいるが、早くしないと俺まで闇に飲み込まれてしまう。

……俺はこれでいいんだ。俺は、闇の住人だから。

さあ、行こうか。戦場へ、戦いの場所へ。今回の目的は二つ。一つは犠牲が少ない方を殺すこと。もう一つは

ツ！
俺の名前はナギ・スプリングフィールド！ 最強の魔法使いだ

アイツの、アリカの『光』となる存在を見つけること。

目指す場所はただ一つ。その場所は

『グレート＝ブリッジ』

今宵、最強の魔法使いと最凶の殺人貴のが激突する

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8467z/>

正義の味方を目指した『殺人貴』

2011年12月31日16時58分発行